

スリランカ人って呼ばれたらどう思う？」と話すと、不思議そうにしていたがそのうち、「ああ、分かった」と腑に落ちたように笑った。何が分かったのかは分からないが、それ以降は要求したとおりの名前と呼ばれた。

私が出会った人々を、タミルだのシンハラだのマレーだのと分類して説明するのと同様に、私も彼らに、恐らく他の日本人客と共に、日本人として分類されていることだろう。それは自然なことだが、個よりも分類が先に来るその呼びかけに寂しさを感じてしまった。確かに、あの日に店でテーブルを囲んだ時にも、自分は日本人であり、Sはマレー人であり、Tはタミル人ではあった。そこにある分類の意味は消えさせてはいなかった。

ただろうが、しかし、それは大したものではなかった。

結ばれる関係に、お互いの分類は無関係ではない。しかし越えられないし越える必要のない区切りが存在している中で、関係し、繋がることはできるということが、他者と関わり続ける希望のように思えた。

引用文献

- 鈴木晋介. 2013. 「キャンディ」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』明石書店, 276-280.
- Department of Census and Statistics-Sri Lanka. 2017. (<<http://www.statistics.gov.lk/PopHouSat/CPH2011/Pages/Activities/Reports/FinalReport/FinalReport.pdf>>) (2017年12月19日)

国境を越えて学ぶ，働く

—タイ，メーソットで出会った移民たち—

木戸 みなみ*

国境の街，メーソット

「タイなのにタイじゃないみたい。」それがタイ北西部に位置するミャンマーとの国境の街，メーソット (Mae Sot) を訪れた感想だった。メーソットへは、タイ第二の都市、チェンマイからバスで6-7時間ほどかかる。道中にいくつかのチェックポイントがあり、

不法に立ち入ろうとする者がいないか、警察が乗客を確認しに来る。私や他の外国人はパスポートを提示し、タイ人は身分証明書を見せているようだった。バスターミナルに到着すると、ホテルまで移動するために乗り合いの小型バスのような車に乗った。私を含め5人の乗客がおり、その全員がタイ人でもミヤ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ンマー人でもないようだった。車はまず国境方面に向かい、私以外の4人はそこで降りた。彼らはそのまま陸路でミャンマーへ移動するようだった。

次の日、現地で働く NGO の方に国境周辺まで連れて行ってもらった。国境は川で区切られている。そのときは9月末で雨季だったので水量が多かったが、乾季になれば水かさが減って泳いで渡れそうかと思うくらいの川幅だった（写真1）。日本という島国で暮らす私には、「向こう岸はミャンマーなんですよ」と言われてもピンとこなかった。岸边を歩いていると、船の渡し屋らしき男性に声をかけられた。NGO の方とその男性が言葉をかわしているのを聞いていると、どうやらタイ語ではなくビルマ語だということは理解できた。船で渡るための料金は50バーツ（約200円）らしい。どうやら、中にはボートで川、つまり国境を越える人もいるらしい。実際そのときも5、6人ほどを乗せたボートが川を渡っているところを見かけた（写真2）。

その後、買い物と食事をするために大型



写真1 国境を隔てる川
雨季なので水量が多い。



写真2 川を渡るボートに乗っている人たち

スーパーマーケットへ行った。店内にあるフードコートのメニューは、全てにタイ語だけでなくビルマ語の表記もあった。またロンヂー（ミャンマーの伝統的な巻きスカート状の衣服）を身にまとう人を至る所で見かけ、自分がいる場所がタイではないような気分になった。

移民として教育を受ける

メーソットでは、日本メータオクリニック支援の会（以下JAM）というNGOから派遣され、看護師として働く日本人女性、Tさんと知り合った。メータオクリニック（*Mae Tao Clinic*）は、ミャンマーからの難民としてメーソットに流れ着いたシンシア医師が1989年に設立した病院である。受診する患者は、ミャンマー国内で満足に医療を受けられず国境を越えてやって来る人、またタイ国内に住む移民や難民だ。JAMはそのクリニックを支援している日本の国際NGOである。

Tさんに紹介してもらい、移民の子どもたちが通うラーニングセンターを訪問した。

ラーニングセンターとはいわゆる移民学校だが、タイ政府から正式に認可された学校ではない。メーソットが位置するターク県内には約70のラーニングセンターがあるらしいが、その中でも最大規模はメータオクリニックによって設立されたChildren's Develop Center（以下CDC）である。CDCへ赴き広い校内を歩いていると、タイの学校には必ずあるタイ国旗や国王の肖像画などが、同じように掲げてあるのを目にした（写真3）。また、タイ人の先生によるタイ語の授業があり、授業風景を見ているとタイ語学習に力を入れていることが分かった。教頭先生によると、移民の人々がタイの公立学校ではなくラーニングセンターを選ぶのは、授業料が安いこと、タイ社会の文化が色濃い現地の学校には馴染みづらいこと、また自分たちの言葉であるビルマ語による教育を希望していること等の理由があるらしい。そもそも、ミャンマーで学校に通うという選択肢はないのか尋ねると、「ミャンマー国内では良い教育を受

けられません。移民がタイの学校に通うにはさまざまな困難があるし、ラーニングセンターは正式な学校ではないですが、それでもタイ側で教育を受ける方が良いんです」と話す。彼の説明によると、公立学校に通うとタイで正式な教育を受けたという卒業資格がもらえるというメリットもあるが、移民にはクリアしなければならない条件があり、タイ国籍をもつ子どものように容易に通えるわけではないらしい。またCDCを卒業した後は、移民の人々が住むエリアで働くか、タイ国内や韓国、香港などの大学へ進学する生徒が大半であり、ミャンマーへ戻る人数は少ないという。

またCDCが直面している問題についても話題にのぼった。経済的に苦しい状況だという。なぜならばCDCの親組織であるメータオクリニックが資金集めに困窮しているからである。Tさんから聞いたところによると、メータオクリニックはUSAID（アメリカ合衆国国際開発庁）から援助を受けており、資金全体の半分以上を占めていた。しかしそれが今年度いっぱい、つまり2018年3月で打ち切りになることが決定したという。援助は1年契約で、これまでは更新され続けてきたが、ついに今年度で終わるらしい。5月から始まる来年度からの資金は、例年の40%程度しか集まっていないとのことだった（2017年10月時点）。援助の打ち切りは、ミャンマーの情勢が曲がりなりにも安定したことにより、諸外国の援助はタイ側にいる移民・難民から、ミャンマー国内にいる人々へ移行しつつあることが主な原因のようだ。



写真3 CDCの正門前

屋台でおやつを売っており、生徒が休み時間に買いに来る。門の周辺にはタイ国旗が掲げられている。



写真 4 CDC が資金集めのために配布している貯金箱

受け取った人はこれにお金を入れ、貯まったら CDC に返す。

最後に、教頭先生が貯金箱のようなものを持ってきた。CDC が貯金箱をできる限り多くの人に配布し、受け取った各々に少しずつでも寄付金を入れてもらい、貯まったら再び回収するというプロジェクトらしい。貯金箱には全て番号が記されており、誰に何番を配ったかが記録してあった。私も CDC に置いてある貯金箱に、気持ちばかりではあるが寄付をした（写真 4）。

移民として働く

メーソットでお世話になった T さんは、ちょうど現地地で 2 年間の任期を終えたところだった。私の滞在中に彼女の送別会が行なわれ、メータオクリニックのスタッフが集まる機会があった。私もそこに参加させてもらい、クリニックのある若い女性スタッフ、N さんと知り合った。彼女はポー・カレンとい

う少数民族の出身で、21 歳だと私に教えてくれた。数年前にメーソットにやって来て、看護師見習い（正式な看護師の資格はもっておらず、トレーニング中）としてメータオクリニックで働いているという。どうしてミャンマーではなくタイで働くのかという疑問を投げかけると「ミャンマーでは稼ぎの良い仕事がない。ここに来たら（看護師としての）技能も教えてもらえるし、仕事があるからね。弟はまだ小さくてこれからお金が必要になるから私が働かない」と話した。また家族と一緒に住んでいるのかと尋ねると、家族は彼女の故郷であるミャンマーのカレン州にいるという。「両親と小さい弟がいるよ」と言って、スマートフォンで家族や故郷の風景の写真を見せてくれた。そして「家族と離れて暮らすのは寂しい。家族に会いたい」と話した。クリニックの中はミャンマー人ばかりなので、ひとつのコミュニティとして居心地は良いが、そこから出るとタイ社会である。彼女の話しぶりから、きっと苦勞がいくつもあって、心細く思うことも少なくないのだろうと想像できた。

単なる線か、大きな壁か

もともとは、ただ川を隔てただけの隣の地域が、国境が引かれたときから向こう側は外国になる。そして、それぞれがタイ人かミャンマー人かのどちらかに区別される。最初に目にした国境は、簡単に越えられるもののように思えた。事実、川を物理的に移動することはそれなりに容易である。しかし、ミャンマーの人が教育や仕事を求めていざタイに

やって来ると、彼らは当然のごとく外国人で、移民ゆえに難しい場面に直面することが多くあるのだろう。そこでは国の違い、境界を強く感じることになるのかもしれない。ミャンマーが政治的変化の過程にある中で、これから彼らの生活はどのように変わっていくのだろうか。タイ側への支援が徐々に減少し、ミャンマー国内に移行していることは、当該地域に暮らす移民の人々へ大なり小なり

影響を与えるはずだ。

メーソットで移民として暮らす人々との交流を通じて、国と国との「境」というものを初めて近くに感じる事ができた。そこで私が見た国境は、簡単に越えられる線のようにも思えるし、やはり明確に区切られた大きな壁のようにも思える。現地の人々にとっての国境は、どのような意味をもっているのだろうか。

こんにちは、カザフスタン！

—アルマトゥのカフェ巡り—

李 眞 恵*

ソ連の崩壊後、独立を遂げたカザフスタンは、ウズベキスタン、タジキスタン、クルグズスタン、トルクメニスタンとともに中央アジアの一員であり、130の民族を抱える多民族国家である。また、「コリョ・サラム」と呼ばれる約10万人のコリアン・ディアスポラが住んでいる国である。筆者は、現代カザフスタンにおけるコリョ・サラム社会の動態に関する研究をしている。2015年、カザフスタンへ赴いた。4年ぶりに訪れたカザフスタンの雰囲気は、相変わらず生き生きとしていたが、前よりも、人々の間にすこし余裕が感じられる。こんにちは、カザフスタン！

日本や韓国より高緯度に位置するカザフスタンに到着すると、間違いなく頭痛に見舞われる。頭痛を癒してくれる現地の温かいチャイ（お茶）を飲もうと、私は喫茶店を探しにホテルを出た。カザフスタンの人々は日ごろから、老若男女関係なく、紅茶を飲むことを愉しみにしている。紅茶への嗜好性が強いためでもあるのだろう、以前カザフスタンに滞在していた頃は、「カフェ」という特別な場所でコーヒーを飲む人々を目にしたことは、ほとんどなかった。しかし、4年ぶりに訪れたアルマトゥでは、コーヒーを提供するカフェが目に見えて増えている。特に「カフェ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科